

ふん ぼん

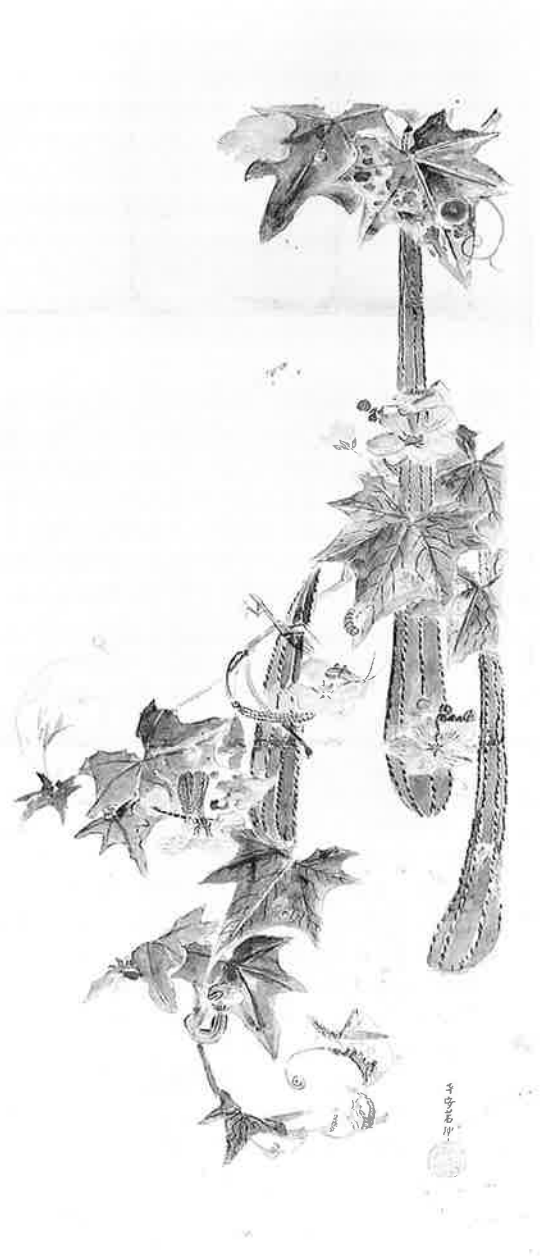
鉄斎の粉本 - 花鳥禽獸を写す -

2012年9月1日[土]-10月8日[月・祝]

10時~16時 月曜日休館 但し9月17日、10月8日は開館、翌日休館



4 模沈南蘋筆 海鶴蟠桃図



44 模伊藤若冲筆 糸瓜群虫図

「粉本」の語源は古く中国唐代にまで遡り、元の夏文彦が画人を論評した『図繪寶鑑』に「古人の画稿、之を粉本と謂う」とあることから画稿を指す言葉であった。我が国においては絵師が後日の制作や研究、修学のために模写したものをいい、永く絵手本として尊重されてきた。こうした粉本には描線だけを写したものの、淡彩を施したものの、色名を識したものの、実寸通り忠実に写したものの、略写したり縮写したもの（縮図）など様々なものが見られる。江戸時代においては土佐派や狩野派など大和絵系漢画系を問わず粉本を蓄積することが盛んに行われ、これらは資料的価値も極めて高い。

近代文人画の巨匠として独自の地位を築いた富岡鉄斎（1836～1924）は、晩年自身の絵は盗み絵だと語った。それは特定の師に就くことなくほとんど独学で画業を修得したことをいう言葉である。鉄斎は「南画論」（鉄斎研究40-11）の中で「古人の真蹟を熟覽しそれらを写すことにより、古人の画格筆意を研究して、自身の画風を確立し、作品を制作していく」ことこそ、画業修得の道であることを説いている。すなわち鉄斎は中国や我が国の古今の名画を模写し、そこから構図、技法、筆法、彩色、画格を学んだのである。分野は仏画、道釈画、山水画、人物画、花鳥画、風俗画、絵図など多岐にわたり、様式では大和絵、狩野派、写生派、南宗画、琳派などあらゆる流派を網羅している。原画や原画の筆者も中国では宋代から清代にいたるまで、日本では平安時代から明治大正時代にいたるまで多彩を極める。若い頃から積極的に模写に励み、画業修得に努め、歳を重ねてもなおその手を休めることはなかった。さらに興味と好奇心から模写の対象は書物の挿図や版画にも及んだ。鉄斎の粉本にはしばしば覚書が識されていて、そこからは模写にいたる経緯、原画に対する考察、あるいは心情なども読み取ることができ、鉄斎の研究における貴重な資料となっている。

さて大正10年（1921）大阪高島屋美術部で鉄斎展が開催された。その時鉄斎は出品作品に花鳥画が少ないことに触れ、「花鳥画は婦女子に見せるもの」と語ったといわれている。これが単なる花鳥画を指していることは言うまでもない。この展覧会を記念して刊行された画集『掃心図画』所載作品56点中、花鳥を描いた作品は《歳寒二雅図》（清荒神清澄寺蔵）など11点を数えるが、自ら画家ではなく儒者であり、意味のない絵は描かないとした鉄斎には、花鳥の図様も絵画を構成する重要な要素であったのである。

鉄斎の写した花鳥禽獣 花鳥画は単に草花や鳥を画題とするだけではなく、その範疇は実在する昆虫類、魚類、犬、猫、鹿、馬、牛などの獣類をはじめ、鼈、鳳凰、麒麟、龍などの伝説上の鳥獣類に及ぶ。鉄斎が花鳥を題材とした作品もまた同様で、描かれた花鳥禽獣の種類は枚挙に暇がない。

さて現在知られる最も若い鉄斎の粉本の一つが19歳で摸した《雉子図》（No.12）である。文人の嗜みとして絵を学び始めた頃のものと思われ、その模写はまだぎこちないが、真摯に模写に向き合う姿勢を感じさせる。そして晩年にいたるまで倦むことなく多種多様な花鳥禽獣を写し研究を続けた。

それでは出品作品の中からいくつかの粉本を取り上げてみたい。

鉄斎は先の「南画論」で「山水花鳥類、写生ヲ能クシテ、千變万化ノ筆格ヲ考究スベシ」（傍点筆者）とし、また「画論」（『画林』第10号 1905）において写生や彩色の重要であることを説いて、写生（写実）を重視した円山応挙を名手と高く評価し、応挙の作品も写している。

《狸図》（No.29）は明治26年（1893）58歳の時に応挙の狸図を毛描きで丁寧に写したもので、この粉本をもとに描いた《老狸図》がある。それには本草学者で写生画家山本溪山（章夫 1827～1903）から聞いた、応挙が飼っていた狸に酒を飲ませその様子を写したという逸話を詠んだ自作の詩を賛とした。同様の詩を賛に持つ「狸図」が《十年研鍊帖》（No.57 清荒神清澄寺蔵）に見られる。応挙の逸話から着想を得た鉄斎は、大胆な筆線で杯を前に腹鼓を打つ滑稽な狸の姿態を描き、それは戯画として変貌を遂げた狸の図となった。

本草学（薬物として用をなす植物・動物・鉱物を研究する中国由来の学問）や博物学に関心を持つ鉄斎は、山本溪山との交友から多くの示唆や教示を得ていたのである（No.9、29、34）。自宅の庭には溪山から贈られた大椿の木や様々な草花を植え写生をも楽しんだ。

鉄斎は細緻な筆法で知られる沈南蘋（No.4、25、39、41）や伊藤若冲（No.44、53、55）の花鳥画も好んで写しているが、それらは作品全体、あるいは部分を大まかな筆線で写したものが多い。写された花鳥禽獣からは鉄斎の興味や関心が何に向けられていたかを知ることができる。

「南蘋」と落款のある《海鶴蟠桃図》（No.4）を見てみよう。沈南蘋（1682～？）は清代の来舶画人で名は銓、字は衡之という。享保16年（1731）に長崎に来航し、その濃彩で緻密な写生画風による花鳥画は江戸時代の画壇に大きな影響を及ぼした。この粉本は南蘋画に見られる緻密な筆法ではなく、太い筆線により画面全体を写し、淡彩を施し、さらに日輪には上朱、下丹、蟠桃の葉には緑青、崖には白六（白緑）、下方の波には胡粉とそれぞれ色名を記している。模写とはいえ動きのある波の描写は、鉄斎の画技の習熟を窺わせるものである。

鉄斎と親交あった今井卓堂の愛蔵書目録『卓堂愛蔵』（大正7年刊行）に、《海鶴蟠桃図》と図様の近似する「南溟 日之出鶴」が所載されている。南溟とは江戸時代後期から明治時代の南画家春木南溟（1795～1878）のことで、山水花鳥画を得意とした。この作品には鉄斎の添書や箱書があり、当然鉄斎の見識が識されていると考

えられる。鉄斎の写した図が南溟の「日日出鶴」なのか、別に南
 蘋の同様の図があったのか現在のところ定かではない。いずれに
 せよ日輪、桃、波、鶴を組み合わせる図を源泉として鉄斎は、
 《寿同日月図》(鉄斎研究40-14)を描いた。この図は蓬萊仙境
 図(同40-12)《忠孝之祚図》(同40-13)と三幅対をなし、鉄斎の
 箱書「天賜福慶図」を持つ。絹本に着色で描かれた大きな太陽、
 太い枝にたわわに実る蟠桃、寄せ来る波、そして二羽の鶴は力強
 く、鉄斎の創意と工夫が反映された充実感のある祝寿の図となっ
 ている。



29 摸円山応挙筆 狸図

1975年の開館以来、「鉄斎の粉本展」は今回で31回を数える。所
 蔵の粉本は400点余となり、そのうちの一部を占める花鳥禽獸を紹介する。判明した原画はカラー写真パネルを制
 作して粉本と比較できるようにし、粉本から本画の迎れるものは併せて展示した。画囊に貯えられた数多の花鳥
 禽獸の粉本は後々、多くは吉祥や慶祝の図として場所を得、賛文と相まって意味を持ち生き生きと蘇っているの
 である。鉄斎の描いた花鳥の画とはどのようなものなのかを考える好機となれば幸いである。(奥田素子)

[参考文献]

小高根太郎『富岡鉄斎の研究』(芸文書院 1944)/正宗得三郎『鉄斎』(平凡社 1961)/岩間(野沢)真知子「富岡鉄斎の臨摹について
 7~12 花鳥画1~6」(日本美術新報社『萌春』282~288 1978~1979)/「鉄斎の粉本」展出品目録(鉄斎美術館、1998~2011)

《出品目録》

[粉本]

番号	名称	原画筆者等	制作年	年齢	本紙寸法	材質・彩色	形状	
1	馬図				27.0×19.7	紙本 淡彩	裏打	
2	憚南田墨帖	憚寿平	明治30	1897	62	各29.4×30.0	紙本着色・墨書	折本
3	オラウータン図				54.1×48.2	紙本 着色	掛幅	
4	海鶴蟠桃図	沈南蘋			107.5×45.0	紙本 淡彩	掛幅	
5	花鳥図	陸遠			154.0×67.0	紙本 淡彩	掛幅	
6	亀図・蟹図				27.5×39.3	紙本 着色	裏打	
7	桂図				27.5×40.0	紙本 着色	裏打	
8	戯画卷	近衛家熙			24.8×96.4	紙本 着色	卷子	
9	玉面狸図	山本溪山			39.0×53.0	紙本 着色	巻子	
10	騎驢図	足利義満			55.8×47.0	紙本 墨画	掛幅	
11	狐図				65.2×65.8	紙本 淡彩	掛幅	
12	雉子図		安政1	1854	19	95.2×30.7	紙本 着色	掛幅
13	魚籃図				27.0×38.0	紙本 着色	裏打	
14	狗子図	伝徽宗			27.4×38.4	紙本 着色	台紙貼	
15	狗子図				27.6×39.5	紙本 淡彩	裏打	
16	孔雀図	窪田雪鷹			102.0×38.0	紙本 着色	掛幅	
17	玄猿図				38.7×53.2	紙本 着色	掛幅	
※ 18	黄梁一炊図	渡辺崋山			158.0×72.5	紙本 淡彩	掛幅	
19	枯木鳥図	陳琳			27.0×37.8	紙本 墨画	掛幅	
☆ 20	勾白字詩七絶		明治28	1895	60	140.3×60.2	紙本 着色	掛幅
21	三獅図	李公麟			28.0×39.0	紙本 着色	台紙貼	
22	猿を襲う鷹図	宮本武蔵			109.0×46.0	紙本 淡彩	掛幅	
※ 23	芝仙祝寿図	渡辺崋山			110.0×33.6	紙本 淡彩	掛幅	
☆ 24	朱鍾馗図	東皐心越			107.0×66.0	紙本 朱画	掛幅	
25	駿馬図	趙子昂-沈南蘋			38.3×44.9	紙本 淡彩	掛幅	
26	時苗騎牝牛図	銭選			24.4×67.2	紙本 淡彩	掛幅	
27	獅子図・六府図				27.6×38.8	紙本 墨画	裏打	
28	象図				38.3×26.4	紙本 墨画	裏打	
29	狸図	円山応挙	明治26	1893	58	38.3×53.5	紙本 着色	掛幅
30	達磨騎牛図		明治27頃	1894頃	59頃	80.0×38.0	紙本 着色	掛幅
※ 31	竹虫図	伝趙昌			112.5×54.8	紙本 淡彩	掛幅	
32	香椿図				27.6×39.6	紙本 着色	台紙貼	
33	繫馬図・人物図				39.2×44.5	紙本着色・墨画	台紙貼	

[粉本]

番号	名 称	原画筆者等	制 作 年		年齢	本 紙 寸 法	材質・彩色	形状
34	伝神写照卷		明治39	1906	71	22.4×375.2	紙本淡彩・墨書	巻 子
35	虎図					110.8×49.6	紙本 着色	掛 幅
36	七草図					38.5×26.8	紙本 墨画	台紙貼
37	鶏図					95.8×47.5	紙本 着色	掛 幅
38	鶏図					78.5×37.8	紙本 着色	掛 幅
※	39	叭々鳥図				78.2×55.0	紙本 着色	掛 幅
	40	ひよこ図				27.3×38.6	紙本 着色	裏 打
	41	葡萄小禽図	沈南蘋			114.0×57.7	紙本 淡彩	掛 幅
	42	燕膏図	蔡夢賓			80.3×46.6	紙本 墨画	掛 幅
	43	鮒図				26.9×38.0	紙本 淡彩	裏 打
※	44	糸瓜群虫図	伊藤若冲			121.0×51.5	紙本 淡彩	掛 幅
	45	碧鳥図				39.6×27.7	紙本 着色	裏 打
☆	46	鳳凰図				76.2×40.6	紙本 墨画	掛 幅
	47	法隆寺玉虫厨子絵				28.0×39.0	紙本 着色	台紙貼
	48	墨竹図	呂端俊 - 谷口諱山			138.1×65.3	紙本 墨画	掛 幅
	49	防風図				40.4×27.4	紙本 着色	裏 打
	50	万年如意図				136.9×39.4	紙本 墨画	掛 幅
※	51	名花十友図	椿椿山			131.5×73.1	紙本 着色	掛 幅
※	52	鳴鶴図	文正			各148.3×90.2	紙本 着色	対 幅
※☆	53	龍図	伊藤若冲			118.4×27.9	紙本 墨画	掛 幅
	54	驢馬図	谷文晁			28.0×39.0	紙本 淡彩	掛 幅
	55	鷲図	伊藤若冲			54.0×39.0	紙本 墨画	掛 幅

※は原画を写真パネルにして展示、☆は本画を併せて展示。

[本画・資料]

番号	名 称	制 作 年		年齢	本 紙 寸 法	材質・彩色	形状
56	勾白字詩七絶			60代	112.0×51.2	絹本 着色	掛 幅
57	十年研鍊帖	明治 40	1907	72	各 28.0×41.4	紙本 着色	画 帖
58	鍾馗騎虎図	大正 3	1914	79	136.4×54.8	紙本 着色	掛 幅
59	休師憫窮図			70代	17.2×43.8	紙本 淡彩	扇 面
60	一休鴉書			70代	径 43.5	紙本 墨書	掛 幅
61	鳳鳴朝陽図	大正 5	1916	81	143.0×41.6	絹本 着色	掛 幅
62	昇天龍図	大正 13	1924	89	132.2×32.0	紙本 墨画	掛 幅

[原画写真パネル] 番号は粉本リストを参照

番号	名 称	筆 者	所 蔵 者
18	黄梁一炊図	渡辺華山	個人
23	芝仙祝寿図	渡辺華山	愛知 田原市博物館
31	竹虫図	伝趙昌	東京国立博物館
39	草花群禽図	沈南蘋	個人
44	糸瓜群虫図	伊藤若冲	京都 細見美術館
51	名花十友図	椿椿山	個人
52	鳴鶴図	文正	京都 相国寺
53	龍図	伊藤若冲	京都 大光明寺

- ・下記の日程で学芸員による展示説明会を行います。
9月15日・29日 各土曜日の午後1時30分より
- ・次回展覧会 「鉄斎の旅 一富士山図屏風と桜巷堂・柴田松園一」
会期 10月16日(火)～11月25日(日)

清荒神清澄寺 鉄斎美術館 〒665-0837 宝塚市米谷字清シー番地
TEL (0797) 84-9600
FAX (0797) 84-6699
<http://www.kiyoshikojin.or.jp>